# 震災を知る
# 備えの一歩に

河北新報社教育・防災連携室
越中谷　郁子

両親の話によると、東日本大震災が発生したとき、1歳3カ月の私は両親と一緒に宮城県東松島市のスーパーにいた。揺れが収まった後、石巻市の内陸部に避難。避難所の石巻市須江小に身を寄せて2日ほどたった後、仙台市青葉区に住んでいる母の姉が車で迎えにきてくれた。当時は東松島市野蒜に住んでいたが、それからは母の姉の家で避難生活を送ることになった。

どうしてかというと、海に近かった野蒜の家は津波で全壊してしまったからだ。母は「お父さんが『津波が来るから家に戻るな』と言っていなければ家に戻っていた」と明かす。母と私は父の適切な判断と言葉に救われた。

家族は震災を忘れないように毎年3月11日、野蒜を訪れている。自宅があった場所は、農地になった。私はまだ小さかったので、暮らしていたころの記憶はない。それでもそこに立つと、不思議なことに本当に流されてしまったんだなという実感が湧いてくる。

その後、必ず海岸にも立ち寄る。普段は、波が穏やかでとてもきれいな海だ。東松島市震災復興伝承館で見たことのある、津波が何もかものみ込む海の凶暴な一面が信じられない。

イラスト　さとうあけみ

地震、津波だけでなく、日本では毎年、豪雨災害が起きている。山形県を流れる最上川をはじめ各地で川が氾濫しているほか、土砂災害も相次ぎ、犠牲者が出ている。家族の震災の教訓から、災害の危険が迫ったら自分や自分がいる場所は安全だという思い込みを捨て、素早く判断、行動することを心がけたい。

災害時は助け合いも大事だ。避難所にいたとき、たくさんの人たちが、毛布を貸してくれたり、ストーブの近くに座らせてくれたり、小さな私を気遣ってくれたという。伯父も寒い中、おむつを歩いて買ってきてくれた。

避難所だけでなく、普段の生活から幼児を連れていたり、お年寄りや困っている人を見かけたりしたら、思いやり、助けることができるような人になりたい。

中学生 かほく防災記者

# 避難訓練の成果 新聞に

## 「夜は危険」「クマ対策も」

宮城県内の中学生が災害への備えを学び発信する「かほく防災記者」（河北新報社主催）第5期の第4回研修が21日、仙台市青葉区の河北新報社であった。

生徒9人が、11～12月に家族と一緒に取り組んだ「私が主役の避難訓練」の成果や課題を発表し合った。

生徒たちは、家族と最寄りの避難先を目指した訓練にできる共助に言及した発表もあった。

原稿の最も伝えたいことを8～11文字で表現する「見出し」について、生徒は本紙記者に作成のこつを

---

中学生 かほく防災記者　第5期 第2回研修 詳報　いのちと地域を守る　防災・減災のページ

# 津波火災 記憶を今に

火災で焼けただれた教室について説明する鈴木さん

## 石巻・震災遺構「門脇小」

### 日頃の避難訓練生かす

校舎は海から約800㍍、旧北川から約500㍍に立地している。大きな揺れの後、学校にいた児童224人と教職員らは校庭に退避したが、大津波警報を聞いて校舎裏手の日和山公園に向かった。学校に駆けつけた保護者や住民に、居残った教職員が児童の避難を伝えたところ、大人たちも日和山を目指した。

鈴木さんは「子どもたちの後に保護者、住民が続く、避難の連鎖が起きた。『私たちが助かったのは門小の子どもたちのおかげ』と感謝された」と説明した。

その後、津波が海と川の2方向から地域を襲った。鈴木さんは「津波が家々をのみこみながら日和山にぶつかり、ごう音を聞いた」と振り返った。おびえる子どもたちを、とっさの判断でさらに海抜の高い雲雀御児神社に避難させた。

学校では火災が発生。震災遺構になった今も、1階校長室、2、3階の教室には火事で焼けた壁や天井、鉄のフレームがむき出しになった机や椅子が、当時の惨状を伝える。鈴木さんは、水と火は相いれないものだが、震災は津波火災が起きたと述べ、災害では思わぬ事態が発生しうることを示唆した。

津波と火の手が迫る中、逃げてきた住民約40人と対応をしていた教職員は協力して、校舎2階から教壇を裏山に渡し、避難した。

鈴木さんは「児童の行動の背景に、日頃の避難訓練や学校生活のルールの徹底があったことを説明。一普段やっていないことを災害時にするのは難しい。皆さんは今の訓練が形式的になっていないか点検し、改善策を学校や地域に提案してほしい」と呼びかけた。

（鹿戸久貴子、須藤昌毅）

### 生き抜く力 培いたい

鈴木洋子先生の話を聞いて、避難訓練の大切さと、一度の避難だけで安心してはいけないことを学んだ。鈴木さんたちは、避難を重ねたことで助かったと話していた。避難の連鎖で命が助かる可能性が上がると思った。避難訓練は常に真剣に取り組み、普段から生活規則を守り、地域の人とも協力して生き抜く力を培うことがとても大切だと思った。この機会に被災した地域や学校のことを、もっと知りたい。

（塩釜市塩釜一中1年　只野彩花さん　12歳）

### 意識高く持って参加

鈴木洋子先生の話を聞き、避難訓練の大切さに改めて気付くことができた。門脇小では避難訓練を一人一人が緊張感を持ち、静かに素早く取り組んでいたという。このことで震災では学校に残っていた児童全員が無事だったそうだ。私は避難訓練に対する自分の行動を見直そうと思った。震災はいつでもどこでも起こり得るということを前提に、自分の命は自分で守るという意識を高く持ち、避難訓練に参加していきたい。

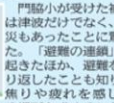
（宮城教育大付属中2年　三浦陸さん　14歳）

### 被害を忘れず伝える

門脇小が受けた被害は津波だけでなく、火災もあったことに驚いた。「避難の連鎖」が起きたほか、避難を繰り返したことも知り、焦りや疲れを感じる中、安心できる場所を求めることの大変さも考えた。門脇小を解体し震災の被害を忘れるのではなく、今に残すことで、震災を忘れず、これからの備えにつながると感じた。被災した場所で伝える、という役割を通して、次の世代に防災のバトンを受け渡していると思う。

（秀光中1年　津村悠葵さん　12歳）

### 学んだ教訓 語り継ぐ



想定をはるかに超える地震で、門脇小の備品は崩れ落ち、津波で流され、教室は火災によって焼け落ちて、机は骨組みだけになってしまった。適切な判断で多くの人が避難することができたが、7人の犠牲者が出てしまい、映像の中で「最適な避難ではなかった」と悔やむ声があった。このような地震は数十年周期で必ずまた来る。同じ悲劇を繰り返さないよう学んだことを語り継ぎ、しっかり備えることが大切だと感じた。

（石巻市河北中1年　永沼好将さん　12歳）

### 震災の威力 想像以上

いざというときに命を守るためには、「指示を聞く」といった当たり前の習慣が、日頃からできていないといけないのだと思った。校舎の見学では、想像していたよりも震災の破壊力が大きかったことを知った。あって当然の机の天板が焼けてなくなっていたり、黒板が倒されて落ちていたりしたことが衝撃的だった。津波や地震に備えるだけでなく、関連して起こり得る災害への対策も今後考える必要が[illegible]

（[illegible]沼田[illegible]中2年　[illegible]沼亜[illegible]さん　[illegible]歳）

### 当時の映像 強い衝撃

研修で感じたのは、地震や津波の怖さや、当時の人たちの必死さだ。津波と火事が同時に起きている様子を映像で見て、強いショックを受けた。まさに地獄絵図そのものだった。もし、私があの場にいたら死を覚悟するだろう。実際に校舎を見て、波の力や災害の恐ろしさを感じた。門脇小では、第5次避難まであったと聞いた。災害が起こるときは、一つの判断が生きるか死ぬかを分けてしまうのだ[illegible]

（[illegible]東駒中3年　後藤結心さん　[illegible]歳）

### 「動ける誰か」になる

門脇小は津波と火事によって物が散乱し、焼け焦げ、灰色の世界だった。あの日ここにいた児童、先生、避難した人はどんなに恐ろしい思いをしたことだろう。門脇小では自宅に帰った7人の児童は亡くなったが、学校に残った人は生き延びた。鈴木先生が言っていた、1人の避難が他の人につながる「避難の連鎖」が大切だと感じた。避難の連鎖は誰かが動かなければ起こらない。自分が連鎖をつくれるようにしたい。

（名取市みどり台中1年　布宮礼仁さん　13歳）

### 目標 行動に移したい

鈴木洋子先生の話を聞いて、三つの大切なことと、防災への目標を考えた。まず一つ目は、今までの自然災害史を学ぶこと。二つ目は、災害を知り、備えることだ。真剣に避難訓練をすることも大事だと思う。そして三つ目は、災害を語り継ぐことだ。次の世代に語り継ぐことも大切。私の防災の目標は「自分で判断し行動できる子ども」だ。緊急時に、どうしたらいいか自分で考え、行動に移せるようになりたい。

（秀光中1年　井上怜さん　12歳）

---

**2021年～**

**計68人が巣立つ**

# むすび塾特別バージョン
# 防災キャンプ

むすび塾

巡回ワークショップ ＠宮城・松島五小 防災キャンプ

# 災害時の避難生活体験

## 松島町と共催 親子で挑戦

河北新報社は8月30、31日、121回目の防災ワークショップ「むすび塾」を、宮城県松島町松島五小で開いた。初めて防災キャンプを実施し、松島町が共催した。町内の小学生と保護者6組12人が参加。町指定避難所の同校体育館に泊まったほか、地元消防団員、松島消防署員、町危機管理担当者の指導を受けながら、消防活動や避難所設営の体験をした。

宮城学院女子大非常勤講師の氏家幸子さん(71)が防災食を監修した。助言者として中日新聞社で防災キャンプを担当する同社地域貢献課の池口真美さん(51)と、一般社団法人減災・復興支援機構専務理事の宮下加奈さん(56)が参加。かほく防災記者の修学生3人がサポート役を務めた。

児童たちは消防団員と一緒に火をおこし、山火事の消火活動に使われるジェットシューターで水を噴射。消防団の車両に乗って地域を巡回した。駐車場には松島消防署の消防車両が並び、はしご車のバスケットに搭乗した。

町の危機管理担当者は、災害時に電気、水道が止まった場合に備え、町が電気供給のハイブリッド車を所有している現状や、簡易トイレの使い方を説明した。

夕飯は自分たちでおこした火で沸かした湯でアルファ米を戻した後、非常用炊飯器で調理したカレーと一緒に食べた。夜には、町の防災備品の折り畳み式パーティションや簡易ベッドの組み立てに取り組んだ。

朝食は、アルファ米を使って「おにぎらず」を作った。児童にはページごとに体験メニューを掲載した「チャレンジパスポート」を配布。課題達成ごとにシールを貼り、全ての任務を完了した。

振り返りの会で宮下さんは「今回は楽しい思い出が残ったかもしれないが、本当に災害が起きると大変なことがいっぱいある。家に帰ったら東日本大震災の時にどうしていたか、家族に聞いてほしい」と児童たちに呼びかけた。

防災キャンプは、中日新聞社が2015年から取り組んでいる「備える!中日サバイバルキャンプ」を参考に企画した。

紙皿を火に見立て、ジェットシューターを体験する参加児童＝8月30日、宮城県松島町の松島五小

㊐お湯を沸かすため、まきを使って火をおこす
㊏簡易トイレの特徴と使い方を町の危機管理担当者から教わった。電気は車から供給している
㊎消防車両に乗って学校周辺を巡回した

### 防災キャンプ・スケジュール

【第1日】
14：00 火起こし体験
消防団ジェットシューター体験
15：00 消防署はしご車搭乗体験
消防団巡回活動体験
18：00 簡易トイレ体験
19：00 アルファ米作り体験・夕食
20：00 簡易ベッド、パーティション組み立て
21：00 消灯

【第2日】
06：00 簡易ベッド、パーティション撤収
ペットボトル洗顔
06：30 ラジオ体操
07：00 「おにぎらず」作り体験・朝食
08：30 反省会

## ▼▼▼ むすび塾に参加して ▼▼▼

### 全ての経験が収穫

松島一小5年 蜂谷 拓久さん(11) 恵美子さん(11)

みんなで泊まるのが楽しくて、夜中まで起きていた。カレーを食べて、アルファ米が意外とおいしかった。

100円ショップで売っているグッズで防災ボトルを作ったことはあるが、避難所生活の体験は初めて。経験できたことが一番の収穫だと思う。（拓久さん）

### 持ち出し袋再点検

松島二小6年 桜井 蒼馬さん(11) 拓郎さん(11)

アルファ米作り、パーティションや簡易ベッドの組み立ては初めてだった。難しいところもあったけど、やり方が分かって勉強になった。（蒼馬さん）

非常用持ち出し袋はそろえているが、中身を確認していなかった。家族で必要なものを話し合い、中身を入れ替えたい。（拓郎さん）

### 子どもの協力感心

松島五小3年 戸田 達重さん(9) 夫さん(9)

ジェットシューターは重かったけど、うまく的に当てることができた。寝ていると虫が落ちてきた。テントみたいに屋根があるといいなと思った。（達さん）

想像以上に子どもたちがしっかりしていた。協力もしてくれて感心した。いろんな役割を頼んでも大丈夫だと感じた。（重夫さん）

### 家で備え話し合う

松島五小5年 飯嶋 榮人さん(10) 郁子さん(10)

はしご車体験はとても怖かった。消防士は命がけで人々を守っていることを知った。

災害はいつ起きるか分からず不安だけど、避難所の生活を想像しながら今回のような経験をしておくと、安心できると思った。家族で話し合い、備えを点検したい。（榮人さん）

### はしご車高さ実感

松島五小1年 今野 銀一さん(6) 敦子さん(6)

ベッドやパーティションを組み立てるのが楽しかった。（銀一さん）

はしご車に乗って遠くの山まで見えた。こんな高いところで働いてる消防士はすごいと思った。震災時の避難所は、ぎゅうぎゅう詰めだった。仕切りがあると、安心感を持って眠ることができた。（敦子さん）

### 食料確保確認する

松島五小2年 後田 陽葵さん(7) 亜紀さん(7)

ベッドを組み立てたりカレーを食べたりして、楽しかった。備えが大事だと分かったので、家族分の食料がきちんとあるか、家で確かめたい。（陽葵さん）

音や光が気になってよく寝られなかったことも含め、たくさんの学びがあった。身近な学校で、貴重な体験ができた。（亜紀さん）

# 桃生中の防災新聞好評

石巻

## 震災の被害と教訓 児童に分かりやすい紙面

宮城県石巻市桃生中の2、3年生が県内の東日本大震災の遺構を訪れ、学んだことをまとめた防災新聞が、地元小学生や住民から好評だ。3年生は震災後生まれの小学生に被害と教訓を伝えるため、こども新聞の体裁にした。防災新聞は来年1月26日に同市蛇田公民館で開かれる「石巻防災・震災伝承のつどい」で展示される。

3年生50人は10月下旬、大震災遺構・伝承館の気仙沼向洋高旧校舎を訪問。語り部の話を聞くなどして、津波の脅威や被災状況、避難行動を取材した。

3年生は、7班に分かれて、A3判表裏の「防災・減災こども新聞」を作った。新聞制作は昨年に続き2回目。今回は小学生が読んでも分かりやすい紙面作りを編集方針に据えた。易しい言葉を選んだり、漢字にはルビを振ったりしたほか、興味を持ってもらえるように、質問形式の記事も掲載した。

平間翠さん(15)は「震災遺構から考える」のタイトルで記事を書いた。大川小の裏山から見下ろした景色や津波が襲ってくる前に校庭に待機した児童の様子を伝え、＜当時の状況が分かるものがたくさんあった。残し続けるのは、後世の人々を守るために必要だと分かった＞とつづった。

桃生中の3年生が制作した防災・減災こども新聞

NIE
Newspaper in Education

### 易しい言葉、ルビ、質問形式の記事も

## 来月 伝承のつどい

生徒たちは11月2日、地域ごとに行われた市防災訓練に参加。小学生、住民に計2000部を配布し、記事に込めた思いも伝えた。平間さんは「小学生が一生懸命読んで、話を聞いてくれてうれしかった。自身の命を守ることを最優先に行動してほしい」と話す。

2年生も7班に分かれ、A4判表裏の「防災・減災新聞 号外」を制作した。藤原あかりさん(13)は、伝承館で上映されている階上中卒業式の答辞を紹介し、＜どんな苦しみにあっても真っすぐ進んでいくという答辞は、世界中の人々の心を動かした＞と記した。

「書き始めたら当時のことを伝えたいという思いが強くなった。もっといいものを作りたいので、本物の新聞をさらに読もうと思う」と話した。

地域の人たちからは「分かりやすい」「防災を真剣に考えるきっかけになった」などの反響があった。

同中は昨年から、NIE（教育に新聞を）活動に取り組むNIE実践指定校。生徒たちは授業の一環で継続して新聞を読んでいる。河北新報社の出前授業も受けて、新聞記事の書き方、

# 石巻市桃生中の取り組み

全校生徒が防災新聞作成

↓

地域住民・小学生に伝える